〔特別賞〕

にほんげんすいばくひがいしゃだんたいきょうぎかい

１．名称　　日本原水爆被害者団体協議会
２．設立　　1956年8月
３．住所　　東京
４．代表委員　　田中熙巳氏、田中重光氏、箕牧智之氏

【受賞理由】

太平洋戦争末期の1945年8月、米国は6日に広島、9日に長崎に原子爆弾を投下した。強烈な熱線や爆風、放射線障害により、同年末までに21万人を超える人が亡くなったとされる。筆舌に尽くし難い惨禍を生き延びた被爆者は56年、米国による水爆実験をきっかけに被団協を結成。「ふたたび被爆者をつくるな」を合言葉に、核兵器の廃絶や原爆被害への国家補償を訴えてきた。

被団協結成に先立ち、長崎では長崎原爆被災者協議会が発足。原爆で下半身不随となった渡辺千恵子さんは、車いすから国内外に核なき世界を呼び掛けた。被団協代表委員を務めた山口仙二さんは、82年の国連軍縮特別総会で被爆者として初めて演説し「ノーモア・ヒロシマ。ノーモア・ナガサキ。ノーモア・ウォー。ノーモア・ヒバクシャ」と声を張り上げた。山口さんの後を継いで被団協代表委員となった谷口稜曄（すみてる）さんは、背中の大やけどの痛みが続く中、世界中で核兵器の非人道性を訴えた。

3人をはじめ、被爆の実相の語り部となった広島・長崎の被爆者の多くは鬼籍に入ったが、残した証言によって核兵器使用をタブーとする国際的世論が非核兵器国を中心に醸成され、2021年には核兵器禁止条約が発効した。条約に核保有国や核の傘の下にある日本などは加わっておらず、核保有国の一部は「核の威嚇」すら繰り返している。こうした現実を前に「長崎を最後の被爆地に」という願いは切実さを増している。「ヒバクシャ」を世界の共通語とし、高校生平和大使など次世代への継承にも力を注いできた被団協の取り組みに深い敬意を表すとともに、核なき世界を確かなものとすべく、西日本文化賞・特別賞を贈る。